第四号に寄せて

吉見　孝夫

『イソップ資料』第四号をお届けします。本号は初めて縦書きといたしました。縦書きの資料を対象としたからです。

第三号刊行後も種々のご教示にあずかりました。

小堀桂一郎氏による森鷗外の評伝『森鷗外――日本はまだ普請中だ――』（ミネルヴァ書房、二〇一三年一月）の一〇二ページに、『北京官話伊蘇普喩言』の訳者中田敬義と鷗外とのロンドンでの出会いが記述されています。お教えいただいたのは著者ご自身からです。この高名な鷗外研究者が、『イソップ寓話　その伝承と変容』（講談社学術文庫、二〇〇一年八月。もとは一九七八年刊の中公新書）の著者であることは、小誌をお読みいただいている方々には贅言でしょう。我が中田と鷗外のロンドンでの一夜を記すのに、これ以上相応しい方はいません。これに触発され、随感と称して中田に関する心覚えを本号に載せました。

因みにこの評伝は、おしゃべりをそのまま文字にしたような出版物が氾濫している中で、その対極にある文章です。古雅な言葉遣い、歴史的仮名遣い、正漢字は、今の学生には抵抗があるかもしれません。しかしその壁を越えれば、論理展開は極めて明快ですので、七〇〇ページ余も一気に読み通すことができます。

東京外国語学校生徒であった中田は、『通俗伊蘇普物語』を出した校長の渡部温に依頼されて、これを北京官話の教科書として訳しました。どうやら渡部は、他にも外国語教科書にするために、例えばフランス書の翻訳を長沢正毅という生徒に促したらしいことが西村賀子氏、志茂淳子氏の論文に示唆されています。これも著者ご自身からのご教示です。論文のタイトルは本号八〇ページをご覧ください。

日本西洋古典学会委員長の中務哲郎氏からアドバイスをいただき、同学会のサイトに小誌第三号発行の案内を載せることができました。これを見た何人かの方々から小誌を読みたいとのご希望が寄せられました。小誌にとっては貴重な読者拡大です。

第三号をお読みいただいた方々からいくつかご指摘を賜りました。第三号六ページ、二八ページにある「両箇の硝子器の嘶」の挿絵には家紋らしきものが見え、当時の政治なりの風刺を読む取ることができそうだとのご提案を遠藤潤一氏からいただきました。確かに薩摩の「丸

に十文字」らしきものが見えます。残念ながら私の知識では読み解きはそこで止まっています。どなたかからお教えを得られたらと願っております。

第三号二〇ページの「狐猫の智」はグリム童話からではないかとの疑問が花間隆氏から寄せられました。この寓話はイソップ寓話集にも載っていますが、諸種の状況から判断すると、ご指摘のとおりグリムからと見た方が妥当だと思われます。そうであるならば、グリム童話からの本邦最初の翻訳となるそうです。きちんと調査すべきところですが、グリムまでは到底手が回りません。

お名前を挙げなかった方々からのを含め、ご教示にはこの場を借りてお礼申しあげます。